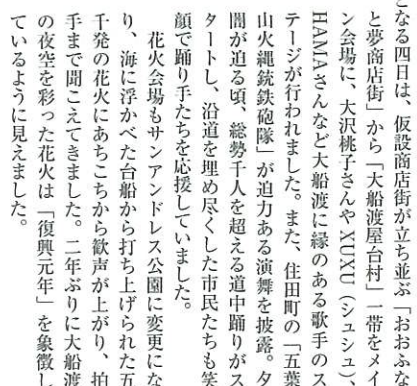




震災から二度目の夏、「祭り」復活の機運が高まり、陸前高田市では「げんか七夕」の山車による「げんか」が、大船渡市では「三陸・大船渡夏まつり」がそれぞれ行われ、復興元年の思いを市民みんなが実感し合いました。

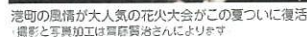
「けんか七夕」が二年ぶりのけんか山車と山車をおつけ合う陸前高田市気仙町の「けんか七夕」。山車が津波で被災し、昨年は山車一台での祭りでしたが、今年は新たに山車を作り、震災後初めて山車同士の「けんか」が行われました。山車をおつける前の緊迫感。太鼓の音が一層大きく鳴り響き、合図とともに引手たちが力強く山車をおつけるその迫力。会場から鳴り響く拍手と歓声。そして、地域の人たちの目に光る涙の中に、受け継がれてきた祭りへの熱い想いを強く感じました。

「うごく七夕」が町内を練り歩く

昨年は高田小学校を会場に行われた「うごく七夕まつり」。今年は少しでも震災前の形に近づけたという大町商店街跡地をメイン会場に行われました。自分たちの地域があつた場所を練り歩き、被災した市庁舎で鎮魂の祭囃子を演奏する祭組の人々。メイン会場では各祭組のお囃子披露など様々なイベントが行われ、市民の楽しそうな姿が見られました。

「二陸・大船渡夏まつり」二年ぶりに開催

二年ぶりとなる「三陸・大船渡夏まつり」が行われたのは八月三日、四日。三日は前夜祭として「海上七夕湾内巡航」が行われ、被災を免れた大船渡丸と明和丸をメインに七夕船団が大船渡湾を巡航し、祭りムードを盛り上げました。



[1]

明日に向かって頑張っている気仙人

逆境にも負けずに頑張っている方々にお聞きました。

新製品は復興の願いを込めて名付けました



おかし工房「木村屋」オーナー
木村昌之さん

陸前高田市内に二店舗を有していた木村さんは、以前に店舗を火事で焼失し再建の苦労を痛いほど経験していたので、昨年の津波直後は再建しようとは考えてもいなかったそうです。

ところが復興イベントで手焼きせんべいを焼いて販売したところ、多くのお客さんは木村屋のお菓子を求めていることが分かりました。今年の五月オープンに至りました。

再開にあたり新しく考案した「夢の樹パウム」も好評で、幸先のよさを予感させてくれます。「現在は仮設店舗ですが二・三年後には本店をオープンしたい」というのが木村さんの今の目標です。

震災後の急速な医療環境の変化に対応



気仙医師会会長
滝田 有さん

滝田医院は昭和二年に開業以来有さんで三代目。八十年以上にわたる地域医療に携わってきました。

震災のその時、奥さんと共に病院の二階に逃げたものの、部屋の中で水没。気を失いましたが、幸い二人とも九死に一生を得ました。

隣町の陸前高田市では気仙医師会の会長をはじめ多くさんの開業医が亡くなり、有さんは気仙医師会の会長に推挙されました。自ら被災した身での会長職は業務の極みですが、「四十年前から住み着いた先祖以来の恩をお返しするつもりで頑張っている」と言います。

震災前からの課題だった人口減少や高齢化がこの気仙地方で一気に進む中、これからの地域医療には関係者の連携が欠かせないと考えています。

仮設の次は本設の商店街を



おふなと夢商店街理事長
(有)三陸海苔店専務
伊東 修さん

昨年十二月にランドオープンした「おふなと夢商店街」理事長で(有)三陸海苔店専務の伊東修さんは現在、本設の商店街づくりに向けて活動中です。

大船渡駅周辺で被災した三十一の店舗・事業所が同居する、大船渡最大の仮設商店街の理事長を務める伊東さん。本来なら商店街運営に力を入れてはいたくないところですが「仮設」であるがゆえ「次」に向けての活動もなくてはならない毎日です。次の街づくりを考えることは、次の商店街を考へること。今までの商店街ではなく、人々が集いたくなるような商店街はどんな空間かを模索する日々が続いています。

同商店街では毎月八の付く日に「夢市」も行われ人気です。

三陸の水産業をサポートしたい



(有)大船渡トック代表取締役
中野利弘さん

海沿いにある(有)大船渡トックの工場は大津波で大きな被害を受けました。

震災後、三カ月ほどは工場などの片づけをし、六月からはサンマ船などの修理をスタートしました。日本財団や国からの支援を受け、現在は修理と機装（船をカスタマイズすること）を中心に三陸の水産業の復興を側面からサポートしようとして取り組んでいます。

新造船や船の修理・機装などの需要過多は数年続く見込みです。さらに「その先」を見据え、中野利弘社長たち造船各社は組合を作り、共同受注など新たな仕事を作ろうと計画中です。

街のお蕎麦屋さんとして気軽に来店ください



蕎麦処「やぶ屋」店主
及川雄一さん

秘伝の甘めのたれで人気だったやぶ屋二代目の雄一さんら親子四人は、昨年の津波からとさのところで避難しましたが、父親の信雄さんは間に合いませんでした。

消防団員である雄一さんは捜索活動が一段落したのち、イベントで出張調理をしていましたがお客さんの復活を望む声に後押しされ、今年の四月に店舗をオープンしました。

自慢のたれの味を再現するために試行錯誤しましたが、今では以前の味を知り尽くしたお客さんにも満足いただけるようになり、今後は街のお蕎麦屋さんとして気軽に来店いただける店を目指して頑張っています。

支援に感謝を込めて演じています



氷上太鼓「氷上共鳴」会長
鈴木武幸さん

十月十一日に二年ぶりに行われる「全国太鼓フェスティバル」に平成七年から欠かす出場している陸前高田市の「氷上太鼓」。

その氷上共鳴会の会長をしている鈴木さんは地元高田町の「うごく七太」にも幹事として参加するほどの根柢からの祭り好き。

その鈴木さんを中心とした氷上太鼓は、週末となる全国のイベントに引っ張りだこの忙しい毎日を送っています。

練習場にしていた太鼓会館は昨年の津波で流失したので新たな練習場所の確保には苦労しています。が、全国からの支援に感謝を込めて「全国太鼓フェスティバル」に向けて練習に励んでいます。

農家のおばちゃんたちと共に



農夢組合代表
熊谷和人さん

震災前は陸前高田市高田町の道の駅「タビック45」に出店していた「採れたてランド高田松原」は、昨年の六月に竹駒町で営業を再開しました。

副組合長の熊谷和人さんは「無我夢中の一年間だった」と振り返ります。

タビック時代は月に四万人が訪れましたが、今は月に五千人がやってくる。復興支援グッズなども取り扱い、お客様のニーズに合わせた店づくりを考えています。九月末には農家のお母さんたちが作る「復興大福」の第二弾が発売を開始。「おばちゃんたちの頑張りを支えられています」と笑顔の熊谷さんです。

ネットワークを復旧活動に活かす



NPO法人夢ネット大船渡理事長
岩城恭治さん

岩城恭治さんは平成十八年に設立された「NPO法人夢ネット大船渡」の理事長。3・11の大震災以降は、夢ネットの経験と組織を存分に生かしながら地域の復興・復興のために活動してきました。

震災直後に気仙地方の応援に駆けつけたNPO法人NPO愛知ネットワークと地元との団体で「気仙市民復興連絡会」を立ち上げ、炊き出しや復興ニュースの発行、がれきの中からの写真探検など、持ち前のネットワーク力を生かして復旧活動を展開してきました。

今は活動の本拠地を三陸鉄道盛（さか）駅に置き、七人のスタッフとともに、被災地視察の団体やツアー客・ボランティアへの情報提供、地元の被災者たちとのパイプ役として汗を流しています。

お菓子で地域に元気を



老舗菓子店「高瀬」店主
高橋照直さん

大船渡市大船渡町内にある二店舗と工場が被災した老舗菓子店「高瀬」。幸いにも盛町の「サンリア」内の店舗と系列のパン店「小麦の丘」が無事だったため、昨年の四月末からシユクリムなどの販売を再開しました。七月には川田に工場を再建し十二月には「おふなと夢商店街」に仮設店舗を開店させました。

店長の高橋照直さんは「ボランティアや視察の人が大勢立ち寄りてくれる夢商店街に出店して良かったと思います。震災後は毎日必死であつという間に時間が経ったという気持ち。地域の支えで今まで商売を続けることが出来たので、うちの菓子で少しでも皆さんに元気になって欲しい」と今日も菓子作りに励んでいます。